

小児科

1. スタッフ（2019年4月1日現在）

			(専門)
科 長(教 授)	山形 崇倫	神経	
副 科 長(教 授)	小坂 仁	神経	
副 科 長(教 授)	田島 敏弘	内分泌代謝	
外来 医長(准 教 授)	村松 一洋	神経	
病棟 医長(講 師)	田村 大輔	感染症	
病棟 医長(講 師)	佐藤 智幸	循環器	
医 員(学内教授)	森本 哲	血液・腫瘍・免疫	
	河野 由美	新生児	
(准 教 授)	矢田ゆかり	新生児	
	熊谷 秀規	消化器・肝臓	
	金井 孝裕	腎臓	
(講 師)	小高 淳	腎臓	
	横山 孝二	消化器・肝臓	
	関 満	循環器	
	翁 由紀子	血液・腫瘍・免疫	
	後藤 昌英	神経	
(助 教)	伊東 岳峰	腎臓	
	早瀬 朋美	血液・腫瘍	
	栗島 真理	リハビリ・神経	
	鈴木 由芽	新生児	
	松原 大輔	循環器	
	川原 勇太	血液・腫瘍・免疫	
	池田 尚広	神経	
	下澤 弘憲	新生児	
	小熊真紀子	内分泌代謝	
病院助教	横溝亜希子	循環器	
	新島 瞳	血液	
	山崎 雅世	内分泌代謝	
	鈴木 峻	循環器	
	古井 貞浩	循環器	
	若林 慶		
	臼井 みほ		
	黒崎 雅典		
	小林 瑞		
シニアレジデント	19名		

2. 診療科の特徴

当科は小児の総合診療および多岐にわたる専門診療（神経、発達、心臓、肝臓・消化器、腎臓、内分泌・代謝、血液・腫瘍、膠原病、喘息・アレルギー、遺伝、新生児、心理）を担当しており、子ども医療センター内で他科の専門外来と連携をとって診療にあたっている。また、救急医療では地域医療機関と連携して、三次救急医

療の重要な役割を果たしている。

病棟は急性期病棟、慢性期病棟、周産期センター新生児集中治療部門にわかれ、それぞれ38床、38床、36床の計112床のベッド数を有しており、必要に応じて小児集中治療室での治療も行う。子どもと家族のニーズに応じた包括的な小児医療と、幅広い分野の専門性の高い検査や治療などの高度な医療を提供している。

・関連領域専門医認定施設

日本小児科学会専門医研修施設（支援施設）
 日本小児神経学会 小児神経専門医研修認定施設
 日本人類遺伝学会 臨床遺伝専門医制度認定研修施設
 日本てんかん学会 てんかん専門医認定研修施設
 日本小児循環器学会 小児循環器専門医修練施設
 日本小児血液・がん学会 小児血液・がん専門医研修施設
 日本周産期・新生児医学会基幹認定施設
 日本内分泌学会認定教育施設
 日本血液学会研修指定施設＊病院全体
 日本胎児心臓病学会 心臓超音波検査専門施設

・認定医

日本小児科学会小児科認定指導医
 山形 崇倫 他21名
 日本小児科学会小児科専門医 山形 崇倫 他64名
 日本小児神経学会認定小児神経科専門医
 山形 崇倫 他9名
 日本てんかん学会認定臨床指導医
 山形 崇倫、小坂 仁
 日本てんかん学会認定臨床専門医
 山形 崇倫 他2名
 日本人類遺伝学会臨床遺伝指導医
 山形 崇倫、田島 敏弘
 日本人類遺伝学会臨床遺伝専門医
 山形 崇倫 他4名
 日本小児循環器学会専門医 関 満 他4名
 日本臨床腎移植学会認定医 金井 孝裕
 日本腎臓学会腎臓指導医 金井 孝裕
 日本腎臓学会腎臓専門医 金井 孝裕、小高 淳
 日本透析医学会指導医・専門医 金井 孝裕
 日本内分泌学会内分泌代謝（小児科）指導医
 田島 敏弘
 日本内分泌学会内分泌代謝（小児科）専門医
 田島 敏弘
 日本消化管学会 胃腸科認定医 熊谷 秀規
 日本消化管学会 胃腸科専門医 熊谷 秀規

日本小児栄養消化器肝臓学会認定医

熊谷 秀規、横山 孝二

日本周産期・新生児医学会指導医

矢田ゆかり

日本周産期・新生児医学会専門医

矢田ゆかり 他2名

PALS Provider

横山 孝二 他11名

日本周産期・新生児医学会新生児蘇生法「専門」コース
インストラクター

矢田ゆかり 他2名

日本血液学会指導医

森本 哲

日本血液学会専門医

森本 哲 他3名

日本造血細胞移植学会認定医

森本 哲、川原 勇太

日本小児血液・がん学会 小児血液・がん指導医

森本 哲

日本小児血液・がん学会 小児血液・がん専門医

森本 哲 他2名

日本医師会認定産業医

横山 孝二 他4名

ICD制度協議会認定

ICD（インフェクションコントロールドクター）

後藤 昌英

日本アレルギー学会アレルギー専門医

1名

日本神経学会専門医

1名

日本東洋医学会専門医

1名

日本内科学会認定

1名

日本成人先天性心疾患学会暫定専門医

1名

日本胎児心臓病学会胎児心エコー認証医

1名

3. 診療実績・クリニカルインディケーター

とちぎ子ども医療センターの1年間の小児科総合診療部、専門診療部および入院診療実績について報告する。
なお周産期母子総合医療センターのNICUについても一部併記する。

3-1. 外来診療

1) 新来患者数・再来患者数・紹介率

新来患者延べ数 2,408人

再来患者実人数 38,579人

外来患者延べ数 40,987人

紹介率 49.9%

2) 小児科総合診療部外来

医師：山形 崇倫（部長・兼）、小坂 仁（兼）、森本 哲（兼）、田島 敏広（兼）、南 孝臣（兼）、熊谷 秀規（兼）、金井 孝裕（兼）、村松 一洋（兼）、小高 淳（兼）、横山 孝二（外来医長・兼）、小島 華林（兼）、早瀬 朋美（兼）、川原 勇太（兼）、小熊真紀子（兼）、横溝亜希子（兼）、渡邊 知佳（兼）、植田 綾子
診療実績：

総合診療部では、午前中の総合診療部外来と午前・午後の救急患者対応を行っている。小児科専門医がそれぞ

れの専門診療部と兼務で診療を行っている。原則として初診は紹介患者と救急搬送患者に限定している。

小児科の診療では常に総合的判断を必要とするため、総合診療部で問題を拾い上げ、的確な診療方針を迅速に立てて、検査や初期治療を実施し、必要に応じて、病棟や各専門診療部に振り分けたり、総合診療部外来で継続して診療しつつ、軽快したあとは紹介元やかかりつけ医に逆紹介している。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
776	742	858	710	811	857
7月	8月	9月	10月	11月	12月
948	1092	837	900	847	929

年間総受診数 10,307人

3) 小児神経外来

医師：山形 崇倫、小坂 仁、村松 一洋、小島 華林、栗島 真理、後藤 昌英、池田 尚広

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
702	740	931	758	686	851
7月	8月	9月	10月	11月	12月
805	933	683	846	859	795

年間総受診数 9,589人

主な診療対象：

複数の疾患を持つ例が多いため、主要疾患の1か月受診者数の概数を記載する。てんかん 400-500人、脳性麻痺や脳炎等による痙性麻痺 100-150人、自閉症スペクトラム障害、知的障害、学習障害や注意欠陥多動性障害等の発達障害500-600人、先天代謝異常症 約30人、染色体異常や中枢神経形成異常 約70人、神経皮膚症候群 20-30人、筋ジストロフィー、重症筋無力症などの神経筋疾患 30-40人、白質脳症、脊髄小脳変性症などの神経変性疾患 10-15人、チック障害、吃音、頭痛等 30-40人であった。この他、人工呼吸器外来において、35人の在宅人工呼吸器患者を診療している。

4) 遺伝外来

医師：野崎 靖之、松本 歩

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
80	77	96	84	74	92
7月	8月	9月	10月	11月	12月
89	92	82	68	104	81

年間総受診数 1,019人

主な診療対象：

Down症候群、染色体異常症候群、Marfan症候群、Williams症候群などの先天奇形症候群や遺伝子検査、遺伝相談など。なお、染色体異常、遺伝性疾患は、神経外来に通院している患者も多い。

5) 小児循環器外来

医師：片岡 功一、佐藤 智幸、関 満、松原 大輔、岡 健介、鈴木 峻、古井 貞浩、横溝亜希子、南 孝臣、白石裕比湖

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
246	302	362	328	287	333
7月	8月	9月	10月	11月	12月
293	378	330	317	311	340

年間総受診数 3,827人

主な診療対象：

先天性心疾患（心室中隔欠損症、心房中隔欠損症、完全大血管転位症、Fallot 四徴症、肺動脈閉鎖症など）の術前と術後、川崎病、不整脈、心筋症、心雑音の精査などを中心に外来診療している。

6) 胎児心エコー外来

医師：片岡 功一、岡 健介、松原 大輔

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
3	5	7	9	12	8
7月	8月	9月	10月	11月	12月
7	6	3	3	5	7

年間総受診数 75人

主な診療対象：

胎児の左心低形成症候群、三尖弁閉鎖症、両大血管右室起始症、Fallot 四徴症、完全大血管転位症、多脾症候群、心臓腫瘍、不整脈など。

その他：院内産科あるいは産科開業医から紹介された、胎児に先天性心疾患や不整脈を持つ妊婦において、胎児心エコー図検査による出生前診断を実施した。

7) 小児腎臓外来

医師：金井 孝裕、伊東 岳峰、小高 淳、齋藤 貴志、青柳 順、別井 広幸

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
224	222	285	195	211	204
7月	8月	9月	10月	11月	12月
245	256	230	220	214	232

年間総受診数 2,738人

主な診療対象（1か月あたりの受診者数）：

小児特発性ステロイド感受性ネフローゼ症候群；約50名、IgA腎症；18名、紫斑病性腎炎；9名、膜性増殖性糸球体腎炎；2名、ループス腎炎；4名、ステロイド抵抗性ネフローゼ症候群；27名、Alport症候群；4名、腹膜透析例；6名、腎移植症例；6名、保存期慢性腎不全；約18名、その他に嚢胞腎、水腎症、尿管細管アシドーシス、HUS、急性糸球体腎炎などを診療している。

外来の特色：

急性血液浄化療法から、維持透析療法・生体腎移植前後の管理まで、ほぼ小児腎疾患のすべてを守備範囲としている。また、他の小児専門診療科からの依頼を受けて、血漿交換療法やG-CAPなどの体外循環療法も行っている。院外との連携では県内はもとより、群馬・埼玉・茨城・福島などからも、紹介を受けている。

8) 小児内分泌外来

医師：田島 敏広、横山 孝二、小熊真紀子、山崎 雅世

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
145	152	190	146	146	144
7月	8月	9月	10月	11月	12月
207	252	119	184	163	186

年間総受診数 2,034人

主な診療対象：

新生児マススクリーニング検査の2次精密検査、および成長障害（成長ホルモン分泌不全性低身長など）、副腎疾患、甲状腺疾患、カルシウム・ビタミンD関連疾患、性分化疾患、思春期発来異常などの内分泌疾患、高コレステロール血症、糖尿病、肥満などの代謝性疾患が主体である。

また下垂体近傍の腫瘍摘除後、あるいは放射線治療後の内分泌障害にも対応している。

9) 小児消化器・肝臓外来

医師：熊谷 秀規、横山 孝二、加藤 耕平、今川 智之、岡田 優子、桃谷 孝之

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
147	157	192	182	146	137
7月	8月	9月	10月	11月	12月
152	158	124	161	142	151

年間総受診数 1,849人

主な診療対象疾患：

炎症性腸疾患（潰瘍性大腸炎、クローン病）、腸管ペーチェット病、胃・十二指腸潰瘍、ヘリコバクター・ピロリ感染症（除菌療法を含む）、若年性ポリープ、機能性胃腸障害（機能性ディスペプシア、過敏性腸症候群など）、B型・C型肝炎ウイルス感染症（キャリア、母子感染予防措置）、胆道閉鎖症（術後を含む）、肝内胆汁うっ滞症（Alagille症候群、症候性肝内胆管減少症、原発性硬化性胆管炎など）、肝硬変（胆道閉鎖症術後、COACH症候群など）、慢性肝炎、急性肝炎（CMV肝炎、EBV肝炎など）、脂肪肝疾患（非アルコール性脂肪肝炎、非アルコール性脂肪肝疾患）、肥満症、代謝性肝疾患（Wilson病、NICCDなど）、胆石症、膵炎などの診断や内科的治療を行っている。

急性虫垂炎、Hirschsprung病、メッケル憩室、肥厚性幽門狭窄症、胃食道逆流症、胆道閉鎖症などの外科的疾患、経皮的または腹腔鏡下肝生検、上部・下部消化管内視鏡および小腸内視鏡検査や内視鏡治療に関しては、麻酔科、小児外科、移植外科、消化器内科と連携を取りながら診療を行っている。

10) 新生児フォローアップ・シナジス外来

医師：河野 由美、矢田ゆかり、俣野 美雪、鈴木 由芽、下澤 弘憲、本間 洋子

診療実績：

新生児フォローアップ

1月	2月	3月	4月	5月	6月
163	160	191	161	153	184
7月	8月	9月	10月	11月	12月
172	198	173	163	177	147

年間総受診数 2,042人

シナジス外来

1月	2月	3月	4月	5月	6月
25	28	26	—	—	—
7月	8月	9月	10月	11月	12月
—	16	15	18	20	22

年間総受診数 170人

主な診療対象：

新生児フォローアップ外来は、NICU退院児を主な対象とし、退院後2週間から小学校3年生まで長期フォローアップを行っている。診療内容は早産・低出生体重児の成長・発達の評価、合併症の治療や精査、必要な養育支援である。染色体異常、先天奇形症候群も多く、気管切開、在宅酸素療法や経管栄養などの在宅医療の管理も行っている。外科系診療科、心理、リハビリテーション部門等と連携して包括的な診療を心がけている。新生児難聴スクリーニングの精査・フォローも行っている。新生児外来の他にシナジス外来でもRSV重症化予防のためにパリエズマブを接種した。

11) 小児血液・腫瘍外来

医師：森本 哲、早瀬 朋美、翁 由紀子、川原 勇太

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
127	118	160	123	136	122
7月	8月	9月	10月	11月	12月
183	170	143	152	136	153

年間総受診数 1,723人

主な診療対象：

急性リンパ性白血病（ALL）や急性骨髄性白血病（AML）、若年性骨髄単球性白血病、悪性リンパ腫、慢性骨髄性白血病、骨髄異形成症候群（MDS）などの血液腫瘍疾患、神経芽細胞腫（NBoma）や腎芽腫、肝芽

腫、網膜芽腫、脳腫瘍などの悪性固形腫瘍、ランゲルハンス細胞組織球症や血球貪食性リンパ組織球症の組織球症、血友病や特発性血小板減少性紫斑病、遺伝性血栓症などの凝固系疾患、再生不良性貧血や遺伝性球状赤血球症、サラセミアなどの赤血球系疾患、慢性良性好中球減少症や重症複合型免疫不全、慢性GVHDなどの白血球・免疫疾患。

2018年の入院で化学療法を行った主な新規腫瘍性疾患は、ALL 4例、AML 1例、悪性リンパ腫 4例、MDS 1例、LCH 2例、NBoma 1例、胚細胞性腫瘍 1例、横紋筋肉腫 1例、脳腫瘍 2例であった。

12) 小児がん経験者の長期フォローアップ外来

医師：森本 哲

診療実績

1月	2月	3月	4月	5月	6月
2	1	11	2	4	3
7月	8月	9月	10月	11月	12月
5	10	5	3	1	2

年間総受診数 49人

主な対象疾患：

小児期に、白血病などの血液腫瘍性疾患、神経芽腫などの固形腫瘍に対して、化学療法や放射線療法を受けた、18歳以上の患者。

13) 子ども化学療法外来

医師：森本 哲、熊谷 秀規、横山 孝二、早瀬 朋美、川原 勇太、五味 玲（小児脳神経外科）

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
29	26	34	28	34	27
7月	8月	9月	10月	11月	12月
24	33	24	25	28	26

年間総受診数 338人

主な対象疾患：

ALLやLCHの維持療法、脳腫瘍などのイリノテカン／テモゾロミド療法、JIAや炎症性腸疾患などのトシリズマブやインフリキシマブ療法など。

14) アレルギー外来

医師：熊谷 秀規、渡辺 知佳、佐藤 優子

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
78	81	97	88	81	71
7月	8月	9月	10月	11月	12月
78	89	79	88	92	110

年間総受診数 1,032人

主な診療対象：

食物アレルギー、新生児乳児消化管アレルギー、食物依存性運動誘発アナフィラキシー、花粉関連食物アレルギー

ギー、気管支喘息、アレルギー性鼻炎、アトピー性皮膚炎、薬物アレルギーなど。

＊食物アレルギー、アナフィラキシー

原因食物の特定や除去食導入を行い、栄養指導、誤食予防の指導を行っている。アナフィラキシー症例は、エピペン®（アドレナリン自己注射）を導入している。診断および耐性獲得確認のため、経口食物負荷試験を行っている（2018年は24件）。

＊気管支喘息

中等症ないし重症持続型の患児が大半を占める。心疾患や神経疾患など基礎疾患をもつ児も多く、他の専門領域と連携をとって診療をしている。

＊アレルギー性鼻炎

通年性アレルギー性鼻炎・季節性アレルギー性鼻炎に対し、ダニ・スギアレルゲンの舌下免疫療法を行っている。

15) 小児免疫外来

医師：森本 哲、早瀬 朋美、川原 勇太

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
69	69	94	88	67	98
7月	8月	9月	10月	11月	12月
80	110	69	64	80	83

年間総受診数 971人

主な診療対象：

若年性特発性関節炎（JIA）、全身性エリテマトーデス（SLE）、シェーグレン症候群（SjS）、若年性皮膚筋炎（JDM）、パーチェット病、自己炎症性疾患（AID）、抗リン脂質抗体症候群（APS）、若年性線維筋痛症（JFM）、新生児ループス（NL）など。

2018年の主な新規症例は、JIA 4例、JMD 1例、JFM 3例、パーチェット病 1例、SjS 1例、高安病 1例であった。

16) 感染症外来

医師：田村 大輔

診療実績：

1月	2月	3月	4月	5月	6月
—	—	—	1	1	5
7月	8月	9月	10月	11月	12月
3	6	4	6	4	4

年間総受診数 34人

主な診療対象：

2018年4月から、新たに感染症外来を開設した。重症感染症にて集中治療を要した患者のfollow up、一般的なワクチン接種スケジュールから逸脱した患者の接種プランニングの相談、基礎疾患による抗生剤予防内服など。

17) 生後1か月健康診査

原則として当院産科を退院した児を対象とする。発育と発達の評価のほか新生児マススクリーニングの結果説明、便色の確認、育児相談を行っている。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
75	66	70	63	62	74
7月	8月	9月	10月	11月	12月
82	70	76	77	64	72

年間総受診数 923人

18) 夜間・休日診療

診療実績：夜間、休日に受診し、小児科医が診療した患者数

1月	2月	3月	4月	5月	6月
215	170	168	168	181	155
7月	8月	9月	10月	11月	12月
216	199	176	178	154	192

年間総受診数 2,172人

19) 心理検査・心理面接

臨床心理士：星子 真美、氏家 莉沙、村上 瑠璃、田所まり子、大森有美子、下牧千佳乃、森 敬統

診療実績：

心理検査件数

＊総検査数（ ）内は新生児検査

1月	2月	3月	4月	5月	6月
18（9）	25（12）	25（11）	33（18）	23（9）	39（19）
7月	8月	9月	10月	11月	12月
46（23）	50（25）	26（13）	30（14）	29（12）	19（7）

年間総検査件数 363（172）件

心理面接件数

＊総面接数（ ）内は新規面接

1月	2月	3月	4月	5月	6月
48（2）	42（2）	57（1）	55（3）	59（1）	64（5）
7月	8月	9月	10月	11月	12月
79（4）	84（1）	67（3）	87（2）	74（3）	64（4）

年間総面接件数 780（31）件

主な対象：

心理検査の内訳として最も多かったのは、神経外来から知能・発達検査、新生児外来から極低出生体重児のフォローアップ目的での発達検査の依頼であった。また、各外科系診療科から手術前後での知的能力の評価や、治療上必要な手技獲得の指導の目安とすること等を目的に検査が依頼される事例もあった。

心理面接は、身体表現性障害や発達障害、それに伴う不登校状態や二次障害についての相談や心理療法の依頼が主である。また、緩和ケアなど長期入院の見込まれる患児・家族への心理的介入の依頼が増加している。その他、患児に関わる医療スタッフや学校等地域機関とのカンファレンスの参加など関係者との連携にも努めた。患

児の状況に応じてより適切な相談機関等の紹介も行っている。

備考：スタッフの内1名は2018年4月より育児休暇から復帰し、他の1名は12月より産前休暇を取得している。

3-2. 小児科入院診療

小児科は主として2A病棟と4A病棟で診療し、重症児については小児集中治療室（PICU）で集中治療を行っている。また、総合周産期母子医療センター（NICU、GCU）で新生児の診療を行っている。

1) 小児科の月別新入院患者数（総合周産期母子医療センターを除く）

1月	2月	3月	4月	5月	6月
96	82	96	108	89	91
7月	8月	9月	10月	11月	12月
105	107	88	118	98	108

総計年間入院患者数 1,186人

2) 入院患者の疾患別内訳（人数；小児科退院患者大分類別疾病統計（ICD-10ベース）、総合周産期母子医療センターを除く）

章名称	件数	件数 (%)	在院日数	在院日数 (%)	平均在院日数
01. 感染症及び寄生虫症	64	5.3	755	3.8	8.5
02. 新生物	128	10.7	4066	20.4	3.1
03. 血液及び造血器の疾患並びに免疫機構の障害	34	2.8	673	3.4	5.1
04. 内分泌、栄養及び代謝疾患	59	4.9	740	3.7	8.0
05. 精神及び行動の障害	3	0.2	67	0.3	4.5
06. 神経系の疾患	119	9.9	1700	8.5	7.0
07. 眼及び付属器の疾患	6	0.5	13	0.1	46.2
08. 耳及び乳様突起の疾患	4	0.3	49	0.2	8.2
09. 循環器系の疾患	44	3.7	707	3.6	6.2
10. 呼吸器系の疾患	234	19.5	4034	20.3	5.8
11. 消化器系の疾患	67	5.6	944	4.7	7.1
12. 皮膚及び皮下組織の疾患	11	0.9	130	0.7	8.5
13. 筋骨格系及び結合組織の疾患	48	4.0	943	4.7	5.1
14. 腎尿路生殖器系の疾患	73	6.1	1286	6.5	5.7
16. 周産期に発生した病態	9	0.7	165	0.8	5.5
17. 先天奇形、変形及び染色体異常	157	13.1	1938	9.7	8.1

18. 症状、徴候および異常臨床所見・異常臨床所見で他に分類されないもの	109	9.1	1096	5.5	9.9
19. 損傷、中毒及びその他の外因の影響	21	1.7	112	0.6	18.8
21. 健康状態に影響を及ぼす要因及び保健サービスの利用	4	0.3	139	0.7	2.9
不明	7	0.6	347	1.7	2.0
総計	1201		19904		

3) 総合周産期母子医療センター（NICU・GCU）

・年間入院患者数

418名（再転科・転入6名を除く）。院内出生366名（初診時から外来観察72名、母体搬送33名、母体外来紹介272名、妊婦健診未受診1名）、院外出生41名（病院等からの搬送39名、自宅分娩1名、車中分娩1名）。

・出生体重（BW）別、在胎週数（GA）別入院数および死亡数。

GA (W)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
22	3	1	2	33.3
23	5	3	2	60.0
24	1	1	0	100.0
25	3	3	0	100.0
26	3	2	1	66.7
27	1	1	0	100.0
28	2	2	0	100.0
29	3	2	1	66.7
30	6	6	0	100.0
31	9	9	0	100.0
32	18	18	0	100.0
33	15	15	0	100.0
34	23	22	1	95.7
35	35	34	1	97.1
36	38	38	0	100.0
37以上	253	251	2	99.2
計	418	408	10	97.6
計	399	396	3	99.2

BW (g)	入院	生存	死亡	生存率 (%)
<500	4	2	2	50.0
<1000	14	11	3	78.6
<1500	25	24	1	96.0
<2000	60	59	1	98.3
<2500	100	98	2	98.0
≥2500	215	214	1	99.5
計	418	408	10	97.6

3-3. 主な検査・特殊治療

1) 心臓カテーテル検査・治療

心臓カテーテル検査・治療の総数は151件（カテーテル治療78件、うち成人症例 10例）であった。カテーテ

ルアブレーション、成人症例は循環器内科と合同で検査、治療を行った。対象疾患は、心室中隔欠損17件、心房中隔欠損23件、ファロー四徴症17件、両大血管右室起始症12件、大動脈縮窄症3件、肺動脈弁狭窄症5件、房室中隔欠損症9件、三尖弁閉鎖8件、左心低形成症候群（亜型含む）9件、純型肺動脈閉鎖5件、肺動脈閉鎖兼心室中隔欠損症6件、単心室3件、完全大血管転位症6件、修正大血管転位症4件、動脈管開存症6件、総肺静脈還流異常症2件、肺動静脈瘻2件、冠状動脈瘻3件、川崎病3件、肺高血圧症3件、その他（総動脈幹症、大動脈弁狭窄症、大動脈弁上部狭窄症、Ebstein奇形、左冠動脈肺動脈起始症、各1件）であった。カテーテル治療78件の内訳は、バルーン血管形成術23件、血管塞栓術（コイル、AVP）14件、心房中隔欠損閉鎖術20件、動脈管閉鎖術7件、バルーン弁形成術6件、心房中隔裂開術2件、肺動静脈瘻閉鎖術1件、冠状動脈瘻閉鎖術2件、アブレーション3件であった。

2) 心臓超音波検査

スクリーニングを含め、3,421件施行している（NICU分は含まない）。

3) 腎生検

23件施行した（開放腎生検を含む）。

4) 造血細胞移植

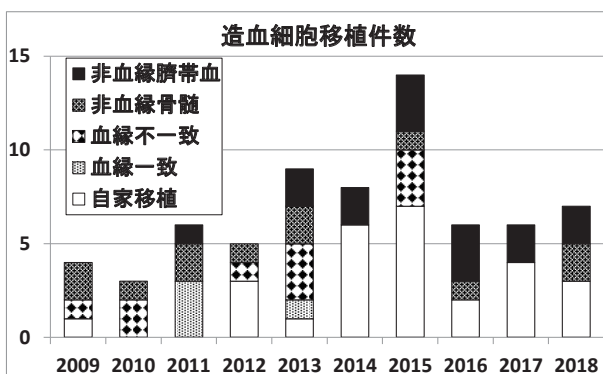
造血細胞移植を7回行った。内訳は、ALL 2回（非血縁臍帯血）、MDS 1回（非血縁骨髓）、先天性好中球減少症1回（非血縁骨髓）、脳腫瘍3回（自家末梢血）であった。

2009年以降に当科で造血細胞移植を受けた患者の初回移植後3年の生存率（2018/12/31時点）

同種移植（腫瘍性疾患）（N=25）82.2%（95%CI, 66.3-98.0）

同種移植（非腫瘍性疾患）（N=8）85.7%（95%CI, 59.8-100）

自家移植（腫瘍性疾患）（N=14）92.3%（95%CI, 77.8-100）



5) 消化器・肝臓系検査

検査実績

A) 消化管系	件数	B) 肝・胆道系	件数
上部消化管内視鏡検査	36	経皮肝生検	6
下部消化管内視鏡検査	48	腹腔鏡下肝生検	0
小腸内視鏡検査		内視鏡的逆行性膵胆造影	2
ダブルバルーン法	5		
カプセル内視鏡	9		

6) 生体腎移植

父親をドナーとする生体腎移植を1件施行した。

7) 経口食物負荷試験

外来と入院とを合わせて24件実施した。

8) 遺伝子治療

AADC欠損症患者1名に遺伝子治療を実施した。2型アデノ随伴ウイルスベクターにAADC遺伝子を組み込んだベクターを定位脳手術により両側比較に注入した結果、運動機能が改善した。これまで計8名に治療を実施し、全例運動機能が改善し続けている。

3-4. 小児科カンファレンス

毎週月曜日、火曜日、水曜日、金曜日の朝に新入院患者の紹介と討議、水曜午後の総回診で入院患者の病状報告と討議を行った。

小児科における症例検討会（CC）は毎週木曜日18時からカンファレンス室で入院例を中心に検討した。以下症例検討会のテーマと担当を示す。

日時	演題	担当
1月11日	治療抵抗性を示したサイトメガロウイルス感染関連特発性（免疫性）血小板減少性紫斑病（ITP）	早瀬、吉成
1月18日	当科IBD診療の変遷：VEOIBDってなに？	横山、加藤、今川、廣瀬、熊谷
2月1日	先天性乳び胸水の2例 当NICUでの乳び胸水の治療方針	小森
2月8日	特発性胃破裂の術後新生児乳児消化管アレルギーと診断した一例	加藤、斎藤、島村、泉
2月22日	好酸球増多症をきたした短腸症候群の1例	木村、辻、若林、尾崎、池田

3月1日	両大血管右室起始、右肺低形成、肺動脈スリングを合併する気管狭窄の新生児例	安済
3月8日	間質性肺疾患を合併した重症複雑心奇形児に対する治療戦略を考える	岡、古井(貞)、松原
3月22日	当院NICUにおける乳児消化管アレルギーの診断と治療	俣野
4月12日	胆嚢癌を合併した異染性白質ジストロフィーの1例	小黒、古井(麻)、尾崎、池田
4月26日	てんかん患者の周術期管理～抗てんかん薬、身体抑制について～	幸田、白井、後藤、栗島
5月17日	Fontan術後に左無機能肺となった7歳男児～治療方針の検討～	松原、関、岡、古井(貞)、森田
5月24日	CBZ内服母体から出生し、低Na血症をきたした新生児症例	小森
5月31日	小腸Crohn病の合併が疑われる高安静脈炎の13歳男子	蓮沼
6月7日	化学療法中に肺動脈性肺高血圧を発症したTリンパ芽球性リンパ腫	井上、翁
6月21日	腹膜透析から血液透析に移行中の小児例－その可能性と問題点について－	福田、丸藤、浅井、黒崎、青柳
6月28日	ILAE（国際抗てんかん連盟）によるてんかん分類と発作型の改訂について	後藤、池田、栗島、小島
7月12日	2018年前半 まとめの会	
9月6日	橋被蓋キャップ異形成の乳児－在宅医療を目指しての治療選択－	鈴木（由）
9月20日	無菌性髄膜炎を合併した急性弛緩性脊髄炎の一例	菊池、尾崎、福田、山上、小野、栗島
9月27日	TOFと肝硬変を合併したAlagille症候群の治療経過と今後の戦略について～経皮的バルーン拡大術の限界とステント治療～	蓮沼、松原、福田、古井(貞)、岡、関、佐藤
10月11日	肝炎後再生不良性貧血を呈した2症例の検討	廣瀬、齋藤、水津
10月18日	高インスリン性低血糖症の3例	黒崎、月田、下澤
10月25日	中枢性尿崩症診断から3年後に鞍上部腫瘍を発症した10歳女児	翁
11月1日	治療抵抗性低血糖の鑑別に苦慮した一例	豊田、小倉、池田、後藤

11月15日	後腹膜腫瘍の圧迫による腎血管性高血圧で慢性心不全に至った乳児例	小黒、伊東、石川
11月22日	新生児ミトコンドリア病の1例	下澤
11月29日	血液浄化療法の種類および適応基準と、高サイトカイン血症治療に関するエビデンス	小高
12月6日	川崎病の治療プロトコルを再考する	石井、福田、関
12月13日	2018年後半 まとめの会	

3-5. キャンサーボード

1) 小児緩和ケアカンファランス

患者さんとその家族のQOL向上を目指し、小児科医、小児脳神経外科医、緩和ケア医、看護師、心理士、理学療法士、養護教諭、地域医療連携部などの多職種による「小児緩和ケアチーム」のカンファランスを開催した。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
2	2	2	2	3	2
7月	8月	9月	10月	11月	12月
2	1	2	3	2	2

年間総開催数 25回

2) 小児腫瘍カンファランス

腫瘍性疾患の集学的治療のため、小児血液腫瘍チーム、小児放射線診断部、外科系各科（小児外科、小児脳外科、小児泌尿器科、移植外科、歯科口腔外科、形成外科など）、放射線治療部と腫瘍カンファランスを開催した。

1月	2月	3月	4月	5月	6月
1	1	2	4	1	2
7月	8月	9月	10月	11月	12月
2	1	1	1	3	2

年間総開催数 21回

4. 2019年の目標・事業計画等

とちぎ子ども医療センター小児科は、小児科疾患の診療のみならず、同センター内、附属病院内のあらゆる診療部門と連携し、小児の全ての疾患領域に対して高度かつ最新の医療を提供する。来年の目標として、①小児科専門診療部門各領域における小児高度医療の推進、難治性疾患の治療成績の更なる向上、②重症児、慢性疾患児の診療や小児救急医療における地域医療機関とネットワークの構築、③小児科医育成の継続、を掲げる。